

＜築地時代 1874（明治7年）～1918（大正7年）＞

立教の創立者チャニング・ムーア・ウィリアムズ(Channing Moore Williams 1829-1910)主教については、「道を伝えて己を伝えず」という言葉が知られているようにわずかな資料しか残されていない。数少ない資料の一つである Spirit of Missions には、東京で英語塾（立教学校）を開校した1874年2月にニューヨークの海外伝道局本部に宛てた書簡が残されている。そこには本国に宛てて、日本の友人たちに貸し出すために「江戸ミッションライブラリー」(Yedo Mission Library)へ書籍を寄贈してほしいという依頼が書かれている。同月上旬に本部に宛てた書簡にも、大阪男子校が要望する書籍として、英文法・読本、数学や哲学といったものがあげられている。小さな私塾の僅かな蔵書群であったかもしれない。しかしこれを見ると、立教開学の頃から書籍を教育と布教のために重要視していたことがうかがわれる。アメリカ聖公会からの図書の寄贈は、その後も連綿として受け継がれていた。立教には第二次世界大戦後もアメリカから図書が寄贈されていた。

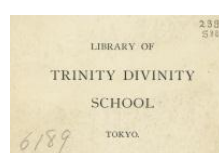


立教学校・三一神学校校舎

残されているアメリカ図書館協会製の事務用「図書台帳」（登録原簿）には、1900（明治33）年から1923（大正12）年にわたり、00001番から始まり約4,800冊の主にアメリカからの寄贈図書が記帳されている。宣教師によって記入されたと思われるが、当時のアメリカの目録規則等に忠実に従って分類番号、図書記号、頁数等の項目が記載されている。

当時の東京では火災が頻繁に起きていた。1876（明治9）年11月には立教学校を含むミッション本部が焼失する火災にあっている。ウィリアムズ主教は1880年に私財を投じて居留地37番を購入し、82年に移転し立教学校を「立教大学校」と改名し、宣教師館、三一神学校などを建設した。校舎は新任のジェームズ・マクドナルド・ガーディナー（James McDonald Gardiner）校長の設計による壮麗なゴシック煉瓦3階建であった。「東京聖三一神学校図書館之印」「Library of Trinity Divinity School」といった蔵書印も残されていることから、図書室にあたる場所もあったと推測される。

1889（明治22）年2月に大日本帝国憲法が公布され、日本的なものへの回帰といった世の風潮にあわせて立教にも日本人教員が増え、カリキュラムもカレッジ的なものから日本の高等学校にあわせたものに改訂されていった。



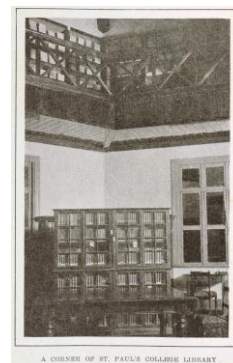
1893（明治26）年にはウィリアムズ主教の後任としてジョン・マキム（John Mckim）主教が来日した。翌1894年6月に「明治東京地震」（M7.0 南関東直下型）が発生し、校舎が大きく崩落する被害を受けた。同年9月に授業を再開したが校舎の再建は一年半後であった。

1899（明治32）年になりガーディナー前校長の設計になる耐震性を考慮した六角塔校舎（六角形五層）が竣工した。六角塔部分は1階が講堂、2階が図画教室になっていた。

3・4階は図書室（書庫）にあてられ、当時の写真も残されている。六角塔を含む校舎は、1923（大正12）年に関東大震災で焼失するまで、築地の園のシンボルとして学生に親しまれた。



築地川から見た立教校舎、右端が六角塔



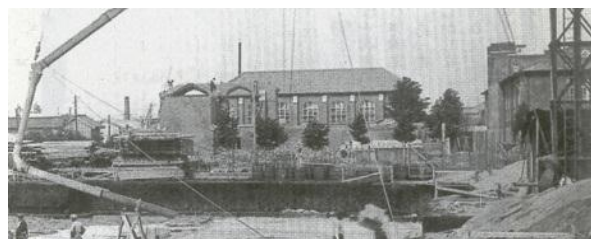
六角塔内の図書室

＜メーザーライブラリー：1919～2012＞ 図書館旧館

立教は1907(明治40)年に専門学校令(明治36年勅令第61号)により、いわゆる「私立大学」の設置を認可された。しかし本格的な大学としての運営には築地キャンパスではスペースが十分ではなかった。タッカー総理のアメリカ国内での募金活動などによって池袋に校地が購入された。次のライフスナイダー総理のもとで完成し、本館(モリス館)・図書館・チャペル・食堂・寄宿舍(2・3号館)など、現在の立教大学のシンボルとなる建物が完成し1919年(大正8年)に落成式が行われた。



立教の煉瓦造りの建築群のいくつかには、募金寄贈者の名前が付されている。メーザーライブラリーの館内に Mather, Samuel Livingston 氏を記念するプレートが掲げられている。このことから当時は「サミュエル・リビングストン・メーザー記念図書館」とも呼ばれていた。

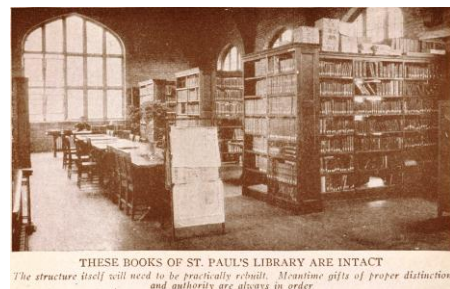


メーザー家は、クリーブランドの鉄鉱・鉄鋼関連企業を代々経営する実業一家で聖公会の信徒として世界各地の教育・医療・福祉分野で多くの慈善事業を行った。落成後の1923年には関東大震災(M7.9)が発生し、メーザーライブラリーも多大な被害を受け、体育館が臨時の図書館として用いられるなどの事態が生じた。1925年に改修も終わり、メーザーライブラリーの裏側に2階建ての書庫兼事務室も増築された¹。改修後に来日しプレートの下で総長とならばメーザー氏の写真も立教大学新聞16号に残されている。



1934年頃の閲覧室風景

メーザーライブラリーの初代館長は、聖公会宣教師のスパックマン Spackman, Harold Charles 1882-1958 (イギリス人)であった。氏は1920年から29年まで館長を務め、アメリカの十進分類法(DDC)の採用や、利用指導案内、自由入館、館外貸出、夜間開館など斬新な取り組みを行った。また、大学当局にも米国に合わせた図書館学科新設の動きが起こったことが記録されている。²



第二次世界大戦の空襲による被害は幸いにも軽微であった。図書館にも焼夷弾が落とされたが、幸いにも弾頭だけが落下して火災には遭わなかったと言われている。1999年、本館(モリス館)やチャペルとともに、東京都選定歴史的建造物のひとつに指定された。



旧館内の階段踊場の記念プレート



スパックマン館長



旧館入り口正面のプレート

¹ 小関昌男『立教大学新座保存書庫：文献案内』2001 p.58 参照

² 小関昌男『メーザーライブラリー資料集』1992 参照

<メーザーライブラリー（図書館参考室 1960-2012）>

スパックマン館長はその後教授として日本に留まっていたが、時局も厳しさを増し、1939年英国がドイツに宣戦布告した翌年に帰朝した。同年の学生の読書傾向を報じた「立教大学新聞」によると、『我が闘争』が予科生の貸出し一位になっている。1942年には読書室に「大東亜共栄圏文献」が購入されたとの記事も掲載されている。

図書館の開館は戦争中も続けられた。1943年の同紙には、オープン（開架）式の図書館で本を自由に借りて読む楽しみを綴った記事も掲載されている。当時の図書館の業務記録『貸本図書月表』をみると、1945年7月は26日間開館し178名の閲覧者があった。8月15日の終戦日は休館となったが、約一ヶ月の閉館後、9月17日には再開している。8月の閲覧者数は116名だったが、9月は322名に、10月は1,243名と急増している。

戦後復興も進み、1953年発行の「立教大学図書館 閲覧案内」によると、「2階が閲覧室になっており、チャペル側の1階の階段下入り口（現立教学院史資料センター）で履物を脱いでから、番号札を取り、階段を上がって2階の閲覧受付で学生証を提示し、入館者名簿に記帳して入館する」とある。

日本の経済成長とともに学生数は急速に増え続け、1958年12月の記録では閲覧者7,524名、貸出冊数1,268冊とあり、図書館はスペース不足の状況となっていた。蔵書は、新館が建設される1960年には15万冊となったが、座席数は130席ほどであった。『立教大学新聞』にも蔵書（和書）の不足、座席の不足を嘆く声が聞こえるようになっていく。

1960年に30万冊収容可能の新館（丹下健三氏設計）が建てられることになり、メーザーライブラリーは一線を退き、参考室として本館に隣接する形で機能を担うことになった。参考業務（レファレンスワーク）は当時もっとも先進的なアメリカ的な図書館のサービスとされ、辞書や事典、各分野の書誌（ビブリオグラフィー：ある主題や人物に関する図書・文献を集めた目録）を集めて参考図書コーナーとして利用に供することが始められた。もちろんデータベースなども存在しなかったため、図書館員がレファレンスツールとして参考文献を収集して各種の書誌カードを作成したり、「参考係」や「読書相談係」として窓口で座って利用案内や文献紹介などを、専用のカウンターで行った。立教大学図書館の参考室の規模は当時としてトップレベルのものだったと思われる。

